

\*1 谷口綾子、藤井聡：豪州におけるモビリティ・マネジメント：パースとアデレードにおける取り組みとその比較。土木計画学研究：論文集，25 (4); pp. 843-852, 2008.

\*2 オーストラリアの山火事のこと。一般によく乾燥しているオーストラリアでは、落雷などによる自然発火や人為的発火で山野が広範囲に燃えることがある。アボリジニーは植物の密集を避けるために季節を選んで意図的に火をはなってきた。

## オーストラリア見聞録〈1〉アデレード編

三谷智子 京都大学大学院医学研究科特定准教授 + 小山真紀 / 二木淑子 / 土井勉

オーストラリアの面積は日本のほぼ21倍の7,682,300km<sup>2</sup>、南北約3,700km、東西は赤道の10分の1にあたる4,000km。広大な国土に人口2,219万が住む。国は6つの州と2つの特別区からなり、それぞれが強い自治権を有している。気候は熱帯から冷温帯までさまざまである。世界一乾燥した大陸でもあり、大陸中央部は砂漠地帯となっている。今回、われわれは南オーストラリア州 (SA) のアデレード、西オーストラリア州 (WA) のパースとビクトリア州 (VIC) のメルボルンを視察した。今回は、2011年3月7日から14日にかけて訪問した南オーストラリア州のアデレードについて報告する

われわれがアデレード、パースの視察を思い至ったのは、両都市の交通施策、モビリティ・マネジメント (以下MM) の取り組みを紹介した1本の論文との出会いによる\*<sup>1</sup>。MMは、ハード面の施策と、コミュニケーションを含むソフト面の施策とを組み合わせることにより、市民に社会的に望ましい行動変容を促すことを目的とする。

オーストラリアは京都議定書には参加していないものの、環境・ヘリテージ省温室効果ガス局では、2008年までに温室効果ガスを8%削減する目標を立て、全国交通行動変容プロジェクトを推進しているという。これらの取り組みを視察し、関係局を訪問することで、われわれが目指す安寧の都市の構想への示唆を得ることができるのではないかと考えた。

### 一人暮らしの高齢者に影響を与える自然災害

アデレードへは、関西国際空港から香港経由で13時間の道のりで、乗り換え時間を含むと15時間を超えた。サマータイムを導入していて、時差は日本より1時間半早くなっていた。アデレードは南オーストラリア州の州都である。人口は114万、入植時から都市政策が実施され、道は碁盤の目のように整然と並んでいる。どこか京都を思わせる落ち着いた街並みである。



Flinders大学の研究者と

このまちで、われわれのカウンターパートナーとなってくれたのは、Flinders大学のProf. Paul Arbanと彼の研究室のメンバーである。日本から留学し、彼の研究室で博士号を取得したDr. Mayumi Kakoと秘書のMrs. Annetteにすべてアレンジしていただいた。

われわれがアデレード空港に到着したのは、2011年3月8日の朝10時50分であった。空港からホテルに向かい、チェックインのあと、Flinders大学で午後3時から最初のmeeting (afternoon tea)を行った。Flinders大学School of Nursing & MidwiferyのResearch Center for Disaster Resilience and Healthを中心に関連研究者のDr. Lidia Mayner, Dr. Lynette Cusack, Dr. Mayumi Kako, Dr. Paul Gardner-Stephenら計7名と、双方のバックグラウンドと研究内容の紹介、それに意見交換を行った。ナース、ソーシャルワーカーなどの医療関係者が多く、両国の災害医療、災害時要援助者のケア、災害看護の現状について語り合った。

オーストラリアでは地震などの災害はほとんどなく、もっとも懸念されるのは夏場の熱中症とbush fire\*<sup>2</sup>である。われわれの訪問直前にも東部オーストラリアで大規模な洪水が発生したが、災害規模のわりには事前の天気予報や警報のおかげで人的被害は少なかった。高齢者の一人暮らしにともなって災害時の避難誘導、孤独死などの問題が発生し、安否確認などのサービスもあるとのことであった。

### 被災者の郵便受けにお菓子やカードを入れる文化

翌3月9日はMrs. Lynetteの案内でDepartment for Families and Communities, Torrens Resilience Institute, Department for Healthの3か所を訪問した。Department for Families and Communitiesでは、Ms. Vicki Cornell, Mr. Tony McLoughlinに対応していただき、SA州の災害対応についてプレゼンしていただいた。オーストラリアでは州の独立性が高いため、州ごとに対応は違うという話であった。災害対策本部のトップは州知事だが、忙しいために現実には防災担当部署の長が切



Mr. Glenn Varonaと共に

り盛りするということであった。

災害時の救援物資については、日本でもよくある問題であるが、古着が送られてくることがあるようだ。これを踏まえて救援物資送付のガイドラインができたという。また、オーストラリアのある地方には、被災者の郵便受けにちょっとしたチョコレートなどのお菓子やカードなどのギフトを入れて送る習慣があり、このような文化を大事にしたいとのことであった。

### 災害発生を止めるのではなく、被害を抑える戦略

次に訪問したのはTorrens Resilience Instituteである。ここで応対してくれたのは、Mr. Glenn Varonaという日本通のフィリピン系軍人であった。この研究所はSA州の4つの大学の協同の研究施設である。彼は、軍隊的なものの見方に基づいて危機管理や災害対策を考えており、防災・災害対策は被害をゼロにするのは難しく、被害を受けても受け流すことのできるような戦略をとることが大事だとの考えに基づいて研究を行っているという。アメリカのコンセプトはRobustnessだが、彼らのコンセプトはRobustnessとResilienceとを目的に応じて使い分けるとのことであった。例えば、アーチェリーはRobustness、日本の弓、合気道、柔道はResilienceであり、Resilienceのキーワードは、フィジカル、インタラクチャル、モラルの3つである。

オーストラリアでは、数年前からWhole of Government Approachが開始されているとのことであった。部署オリエンテッドでなく、タスクオリエンテッドで各部署を横につないで一緒にタスクに当たるコンバインドオペレーションという試みである。完璧なプランというのは、これで十分に良いというプランではないという話であった。

### 世界各地の災害地に救援隊を送る

最後に訪問したDepartment for Healthでは、Ms. Val Smythが応対してくださった。日本の厚生省のような組織で、対象とする災害などは、基本的に日本と同様である。災害時には、住民の健康危機管理を行う。高齢者の医療に関しては、日本と同様にオーストラリアの高齢者も、長年住み慣れた地域から引っ越すことを敬遠しがちなことから、車社会のオーストラリアでは車の運転ができなくなると生活に支障をきたすとのことであった。

AUSMAT (Australia Medical Assistant Team)などオーストラリアの災害医療の全体像についてもプレゼンしていただいた。オーストラリアは日本に比べると災害が少ないが、インドネシアでのスマトラ津波災害では、当初から救援のため現地入りしたほか、世界各地の災害地に救援隊を向かわせているとのことであった。

### 社会背景は異なっても共通する課題

今回、われわれが訪問したアデレードの機関のキーワードは、「健康・医療」と「災害」であった。「交通施策」については、稿を次の訪問地パースに譲るとする。わずか2日という短い時間であったが、オーストラリアの「住み良さ」の一端を感じ視ることができたように思う。住み良さの一端を担う要因は、日本に比べて圧倒的に広い国土と少ない人口、少ない災害、国土の中央部は乾燥地帯であるが人口が集まっているところはいずれも比較的穏やかな気候の地であることである。

さらに、少子高齢化が進み、人口が減少しつつある日本と異なって人口が増加しており、天然資源が豊富であることなどは、日本と根本的に異なる点であると思う。国情はかなり異なるものの、災害医療に関する考え方、健康危機管理に関する考え方などで日本と共通の課題も多く、学ぶことの多い視察であった。



自転車とカフェ